

寺山 修司（てらやま・しゅうじ）☆常設展示作家

1、寺山修司の生涯

<生涯1 時には母のない子のように> 0歳～18歳 1935～1953

警察官の父八郎、母はつの長男として生まれる。9歳の時に青森空襲で焼け出され、父の兄義人の営む古間木（現三沢市）駅前の食堂の2階に転居し、古間木小学校に編入学する。父のセレベス島での戦病死の報が届き、母は、米軍のベースキャンプに働きにでる。古間木中学校に入学するが、青森市で映画館（歌舞伎座）を経営する母の叔父のもとに預けられ、青森市立野脇中学校に転校、文芸部に属し、童話・詩・俳句・短歌を学校新聞などに発表する。母は九州の米軍キャンプに移った。

青森高校時代は、学校新聞部、文学部に属し、俳句に熱中、以後の本格的な創作活動の緒についた。雑誌への投稿などにより全国に名を売っていた。

<生涯2 空には本> 19歳～23歳 1954～1958

1954（昭和 29）年早稲田大学教育学部国文学科に入学した寺山は、サークル「早稲田詩人」に入部。中城ふみ子の短歌「乳房喪失」に刺激され「チェホフ祭」50首を詠み、第2回短歌研究新人賞を受賞し、歌人として新しい感覚の世界を世に問うて認められる。

母はつは、立川基地に住み込みメイドの職を得る。混合性腎臓病を発病し入院するが、2ヶ月後退院し、しばらくすると今度はネフローゼで入院し、絶対安静の日が続く。3年余の入院生活中、短歌の発表、作品集刊行など、中井英夫、谷川俊太郎の助力を得、旺盛な創作活動を展開していく。22歳の7月退院。青森市に帰郷するが、再上京をし、新宿のアパートに居を構える。

<生涯3 わが恋の旅路> 24歳～31歳 1959～1966

1959年、執筆したラジオドラマが「中村一郎」民放連会長賞を受賞し世に知られ始め、翌年 1960年は華やかに活躍しながら駆け抜けた最初の年と言える。ラジオドラマ3作目「大人狩り」が革命と暴力を煽動するものとして福岡県議会で取り上げられる。戯曲を上演。ジャズ映画実験室を組織し、映画を演出。ジャズと詩

の朗読を試演。土方巽と言語と肉体の結合の試みとして「贗ランボー伝」などを発表。石原慎太郎、大江健三郎らの「若い日本の会」に参加。篠田正浩監督の映画「乾いた湖」のシナリオを書く。小説「人間実験室」を発表。

1961(昭和 36)年 25 歳の時、13 年ぶりに母と同居するが、永くは続かず、27 歳、脚本を書いた縁で知りあった映画女優九條映子と結婚したことから、別居する。

<生涯4 書を捨てよ町へ出よう> 32 歳～47 歳 1967～1983

1967(昭和 42)年 31 歳、演劇実験室「天井桟敷」の設立により、個人「寺山修司」に組織人「主宰寺山修司」が加わり、寺山修司は、さらに社会に影響を及ぼす存在となった。

1969(昭和 44)年の渋谷・天井桟敷館の開館は「家なき子」に家を与え、天井桟敷の海外公演をとおして寺山修司は世界に進出して行き、成果を収めた。

絶対安静が続いた死の床から起き上がり、華々しく時代を疾走した寺山修司は、ネフローゼ治療の際の輸血が原因の肝硬変に腹膜炎を併発し、1983(昭和 58)年 47 歳で亡くなった。

2、寺山修司の代表作

○『寺山修司全歌集』

中学時代に既に短歌を始めていたが、本格的に取り組んだのは、中条ふみ子の第1回短歌研究新人賞受賞作「乳房喪失」に刺激を受け「チェホフ祭」50 首を詠み、第2回の同賞を受賞してからである。歌人として新しい感覚の世界を世に問い成功を収めた。

ネフローゼで入院中の 1957(昭和 32)年には短歌・詩などの作品集『われに五月を』、1958(昭和 33)年には第一歌集『空には本』、1962(昭和 37)年には歌集『血と麦』、1965(昭和 40)年には歌集『田園に死す』を刊行する。

1971(昭和 46)年1月に、それまで発表した3歌集に未刊歌集「テーブルの上の荒野」を加え、自ら刊行したのが『寺山修司全歌集』である。「全歌集」と名付け「歌の別れ」とした。しかし、その後も歌を作り続け、再び『寺山修司全歌集』(1982年 11 月)を出すこととなる。

○『花粉航海』

寺山修司の本格的な創作活動の原点は、俳句である。俳句は、中学校時代から始めていたが、高校に入り親友の京武久美に刺激を受け、俳句に没頭した。しかし、短歌への興味と入れ替わるように、上京後の 1955(昭和 30)年には、俳句の実作を断っている。

1957(昭和 32)年には短歌・詩とともに俳句を収めた第一作品集『われに五月を』を、1975(昭和 50)年句稿「わが高校時代の犯罪」(別冊新評『寺山修司の世界』掲載)を発表した。

1977(昭和 52)年 39 歳の時、自選句集『花粉航海』を刊行し、著者あとがき「手稿」には「歌ばかりでなく、句のわかれもすみやかに果たしてしまいたい」と俳句との訣別を告げている。

しかし、最晩年には、俳句の同人誌「雷帝」を創刊しようと俳句に意欲を見せていたが、果たさぬまま亡くなった。

○『誰か故郷を想はざる』

1969(昭和 44)年刊行された『誰か故郷を想はざる』は、1973(昭和 48)年に文庫本化されている。「自叙伝らしくなく」と副題がついており、記憶の再構築により過去を虚構化し、起きなかったことも歴史であると考え、生まれ故郷もフィクション化する。

生前は、100 人のファンがいれば 100 人の反寺山がいると、評価が分かれる存在であったが、青森においても、寺山に虚構化された故郷に生きているせいか、理解を得られることが難しい存在ではあった。郷土から離れるほど、また日本より世界、と評価は高かった。しかし、寺山修司は反郷土では決してなく、作品群から見ても分かるように、むしろ、故郷を巡った作家である。嫌がっていたねぶた祭りを見るため夏に帰郷する計画をした年の5月に亡くなった。

わが息もて花粉どこまでもとばすとも青森県を越ゆる由なし (『田園に死す』)

3、寺山修司のキーワード

<キーワード1 生い立ち>

自叙伝でさえ虚構化することから、生い立ちを父の戦病死による母子家庭、貧乏、母との離別など悲惨な育ちと解されることが多い。

しかし、母との離別からの影響は否定できないとしても、寺山修司に対する故郷の人間が持っている記憶は、戦時中でもキリスト教系の幼稚園に通っていた修ちゃん、半ズボンに靴という都会的な小学生、住まいは映画館の楽屋裏ではなく館の裏の一軒家、あるいは青森市松原の家、大学受験にまで付き添って行く歌舞伎座の母がわりの大叔母の存在、大学に進学できたことなど、経済的には恵まれていないというほどではない。

寺山修司は、自叙伝さえ虚構化するので、作品に表現される「私」と実物の寺山修司の差がある。天才と感じさせるほどの才気を持つ魅力的な人物である。それ故、多彩な友人が多い。

<キーワード2 寺山修司多面体>

活躍の分野は多岐に渡っている。童話・詩・俳句・短歌(「学校新聞」中学校時代～)。雑誌創刊編集(「青蛾」1951年～)。組織(「全国学生俳句会議」1952年～)。戯曲(詩劇「忘れた領分」1955年～)。ラジオドラマ脚本(「中村一郎」1959年～)。映画シナリオ(「19歳のブルース」1959年、「乾いた湖」1960年～)。映画製作(「猫学 Catlogy」1960年～)。詩朗読会(1960年)。テレビドラマ脚本(「Q」1960年～)。小説(「人間実験室」「文学界」1960年～)。評論(『ジャズを楽しむ法』1961年～)。劇団設立・演出(天井棧敷 1967年～)。作詞(「時には母のない子のように」1969年)。写真(『幻想写真館●犬神家の人々』1975年～)。ほか。

多様なジャンルから生み出す作品の、現実に関われず虚構化された多面的な「私」(寺山修司)は、受け手(読者・観客)の各々個々の理解により、無数の寺山修司になる。

<キーワード3 天井棧敷>

「組織ではなく、事件であった」と寺山修司が述べた演劇実験室・天井棧敷は、寺山の戯曲を上演した早稲田大学生の劇団「仲間」の演出家東由多加と知り合ったことを契機に、「見世物の復権」を掲げ、グラフィックデザイナーであった横尾忠則と妻の九條映子(後に今日子)が中心となり1967年に結成された。東と横尾は天井棧敷館開館前に退団したが、九條映子は、離婚後も、最後まで理解者と

して、公演・映画などの製作者として共に歩み、「寺山修司の世界」構築に尽くした。第1回公演を「青森県のせむし男」とし、1969年には天井棧敷館を開館、さらにドイツでの海外公演と進展し、1983年の死去後に解散した。青森県では、1972年に青森市・弘前市で「邪宗門」を、1993年に青森市の演劇家牧良介の尽力で、天井棧敷の中核メンバーであったJ.A.シーザー主宰の「万有引力」が天井棧敷の中心のメンバーも加え、「奴婢訓」を上演している。

4、寺山修司のゆかりの場所

①寺山修司文学の原点

市民の森・小田内沼展望所(三沢市淋代)

寺山修司の短歌3首が書かれている。

- ・君のため一つの声とわれならん失いし日を歌わんために
- ・一粒の向日葵の種まきしのみ荒野をわれの処女地と呼びき
- ・マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや

②寺山修司初の歌碑

十和田市(十和田市西二十一番町)

寺山修司の従妹夫婦の手によって建立されたもの。

猪熊弦一郎の筆跡による歌 碑で表裏に一首ずつはめこまれている。

- ・マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや
- ・ころがりしカンカン帽を追ふごとくふるさとの道駆けて帰らむ

③日本現代詩歌文学館のある地に

橋本児童公園(岩手県北上市)

「文学碑のあるまちづくり」を目指す北上市で建立した。

- ・百年たったら帰っておいで百年たてばその意味わかる

④母とともに眠る

高尾霊園(東京都八王子市)

石碑の表面にはただ「寺山修司」とあり、墓碑とは明記されていないが、平成3年12月になくなった母はつとともに眠る。

5、寺山修司の関連人物

☆京武久美(きょうぶ・ひさよし) :友人

中学1年の時、母の都合で、大三沢町立古間木中学校から転校した先の青森市立野脇中学校に京武久美がおり、共に学級雑誌の編集委員に選ばれ、また同じ文芸部に属し友人となった。

青森高校入学後、東奥日報の俳句欄に京武の俳句が掲載されたことを契機に、寺山は俳句に熱中する。山彦俳句会結成。「暖鳥」句会に出席。高校生俳句大会開催。全国の十代の俳句雑誌「牧羊神」創刊。共に活動を展開していく。

高校卒業後、青森に残った京武と、東京へ出た寺山とふたりの道は別れたが、俳句から本格的な文学創作への道を歩むことになった寺山修司への成立には、京武久美の存在は大きい。

☆篠田正浩(しのだ・まさひろ) :友人

篠田正浩は、映画監督作品1作目を撮り終えた1960年、詩人白石かずこに「天才が現れた」と教えられた寺山の短歌「マッチ擦る・・・」に衝撃を受け、新宿諏訪町の幸荘に寺山修司を訪ねた。

知り合った1960年に監督する映画「乾いた湖」のシナリオ執筆を寺山修司に頼み、1961年に「夕陽に赤い俺の顔」「わが恋の旅路」を、1962年に「涙を獅子のたて髪に」、1970年に東宝「無頼漢」をとコンビの映画が続く。

「心中天の網島」は、「寺山体験がなかったら作れなかった」と篠田は語っているが、寺山にとっても、篠田との出会いが、映画制作に大きな影響を与えたと言えるだろう。

☆谷川俊太郎(たにかわ・しゅんたろう) :友人

1955(昭和30)年、ネフローゼで入院中の寺山修司は、5月、早稲田大学緑の詩祭の詩劇グループ「ガラスの髭」公演に戯曲第1作「忘れた頒分」を書いた。詩

劇を見た谷川俊太郎は、寺山修司の才能に魅かれ、病院を訪ねて行ったことから、生涯の交流が始まった。

谷川は、1957年中井英夫の好意と助力で処女出版された作品集『われに5月を』への協力を初め、放送シナリオ執筆の斡旋など世に出る契機をつくった。寺山の死を看取り、告別式の葬儀委員長を務めた。

寺山が詩人谷川俊太郎に出会い、才能を見い出され世に出たこと自体が、一つの大事件と言えるだろう。

6、寺山修司の資料紹介

○血がつめたい鉄道ならばはしり抜けてゆく汽車はいつかは心臓を通ることだろう
同じ時代の誰かれが地を穿つさびしいこのひびき

書画(色紙)

270 mm × 240 mm

「血がつめたい鉄道ならばはしり抜けてゆく汽車はいつかは心臓を通ることだろう
同じ時代の誰かれが地を穿つさびしいこのひびき 「あゝ荒野」より」
マジック書き。

○「田園に死す」

印刷資料(ポスター)

1974(昭和49)年

720 mm × 510 mm

映画「田園に死す」のポスター。青森県の上北町、七戸町、むつ市の恐山などで撮影したもの。寺山の映画作品の代表作。

○「墓場まで何マイル？」

原稿

1983(昭和58)年

257 mm × 362 mm 3枚

昭和 58 年 5 月 4 日 47 歳で亡くなった寺山の絶筆。「ジャズがきこえる」の表題が付いている。「週刊読売」昭和 58 年 2 月 13 日号に掲載された。三沢市教育委員会所蔵。

○『寺山修司全歌集』

図書

1971(昭和 46)年 1 月

215 mm × 136 mm

『寺山修司全歌集』は風土社より昭和 46 年 1 月に刊行された。『空には本』、『血と麦』、『田園に死す』の三歌集の他に「初期歌篇」、未刊歌集『テーブルの上の荒野』、それに 7 編の歌論が収載されている。塚本邦雄の解説がある。

7、寺山修司年譜

1935(昭和 10)年…12 月 10 日、警察官であった寺山八郎、はつの長男として、弘前市紺屋町に生れる。

1937(昭和 12)年…五所川原、浪岡、青森、八戸と転居。

1941(昭和 16)年…父が出征。青森駅で見送る。

1942(昭和 17)年…青森市立橋本小学校に入学。

1745(昭和 20)年…7 月 28 日青森空襲。

古間木(現三沢市)駅前の父の兄義人の営む食堂に間借。

古間木小学校に編入学。父の戦病死の報届く。

1948(昭和 23)年…古間木中学校入学。

1949(昭和 24)年…青森市の母の叔父に引き取られたため、青森市立野脇中学校に転校。

母が九州の米軍キャンプで働くため、別居。

1951(昭和 26)年…4 月 6 日青森高校に入学。

新聞部、文学部に入部。俳句に熱中する。

1954(昭和 29)年…早稲田大学教育学部国文学科に入学。

「チェホフ祭」で第 2 回短歌研究新人賞。

混合性腎臓炎発病、入院。

1955(昭和 30)年…ネフローゼで入院、面会謝絶となる。

1957(昭和 32)年…1月、第一作品集『われに五月を』刊行。

1958(昭和 33)年…6月、第一歌集『空には本』刊行。

退院。

青森市に帰郷。

再上京。

1959(昭和 34)年…ラジオドラマ「中村一郎」民放連会長賞。

1961(昭和 36)年…新宿左門町の一戸建てアパートに転居し、母と同居。

「李庚順」を「現代詩」に連載。

1962(昭和 37)年…九條映子と結婚。

母と別居。

第二歌集『血と麦』刊行。

1963(昭和 38)年…各大学で「家出のすすめ」を講演。

1967(昭和 42)年…横尾忠則、東由多加、九條映子らと演劇実験室「天井桟敷」
設立。

第一回公演「青森県のせむし男」。

1968(昭和 43)年…『誰か故郷を想はざる』刊行。

1969(昭和 44)年…渋谷・並木橋天井桟敷館開館。

「時代はサーカスの象にのって」公演。

作詞した「時には母のない子のように」が大ヒット。

ドイツ国際演劇祭で「毛皮のマリー」「犬神」上演。

1970(昭和 45)年…第 12 回公演「市街劇・人力飛行機ソロモン」。

九條映子と離婚。

ドイツ語版『あゝ、荒野』刊行。

1971(昭和 46)年…長篇映画「書を捨てよ町へ出よう」公開、サンレモ映画祭グラ
ンプリ。

ナンシー演劇祭、パリ、アムステルダム、オランダフェスティバ
ルで天井桟敷公演。

『寺山修司全歌集』刊行。

1972(昭和 47)年…青森市、弘前市で「邪宗門」を上演。

ミュンヘン・オリンピック芸術祭で野外劇「走れメロス」を上演。

1974(昭和 49)年…映画「田園に死す」公開。

1976(昭和 51)年…渋谷天井棧敷館閉館、本拠を麻布十番に移す。

1978(昭和 53)年…「奴婢訓」ヨーロッパ巡演(オランダ・ベルギー・西ドイツ各都市)。

フランスのオムニバス映画の一編「草迷宮」を脚本・監督。

東陽一監督作品「サード」の脚本を執筆。

1979(昭和 54)年…肝硬変のため病院に1ヶ月入院。

1981(昭和 56)年…肝硬変のため約1ヶ月、病院に入院。

1982(昭和 57)年…映画「さらば箱舟」沖縄ロケ。

最後の海外公演「奴婢訓」パリ上演。

谷川俊太郎とビデオレターの交換。

1983(昭和 58)年…「墓場まで何マイル？」執筆。

4月22日、意識不明となり杉並区の河北総合病院に入院。

5月4日午後0時5分、肝硬変と腹膜炎のため敗血症となり

死去。